

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2026.5.17 No.32



第20回記念大会 多くの方にご参加いただきました

第20回研究大会が、2026年3月7日（土）に武庫川女子大学の教育総合研究所にて開催されました。今回は会員の方だけでなく、日本臨床教育学会の会員、大学院修了生にも広く呼びかけ、37名の参加がありました（現地参加31名、オンライン参加者6名）。お忙しいところ、ご参加頂きまして、ありがとうございました。

◆9本の自由研究発表

第1分科会

1. 二羽 礼さん（東大阪大学）
子どもの最善の利益はどこで生まれるか -「出会い」という視点からの試論-
2. 岨中 庸子さん（社会福祉法人甲賀学園 鹿深の家・心理士）
児童養護施設の組織の心理的安全性について -1年目の心理職員が感じたこと-
3. 山本 真樹子さん（奈良学園大学）
助産師のありようについての一考察

第2分科会

1. 岩崎 久志さん（流通科学大学）
被爆二世による平和学習実践の可能性と課題 -ある被爆二世への聞き取りを通して-
2. 本多 祐子さん（愛知大学非常勤講師・名古屋市スクールカウンセラー）
臨床家の専門性を問い直す学際的視座 -ホロニカル・アプローチを手がかりに-
3. 吉益敏文さん（豊岡短期大学）
勝田守一と松田道雄育児論の思想について -論文『歴史と医学と教育と』を読んで-

武庫川臨床教育学会

<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558

兵庫県西宮市池開町 6-46

武庫川女子大学教育総合研究所内

電話番号:075-922-7749（吉益自宅）

メール: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

第3分科会

1. 上田 孝俊さん

鹿島和夫の実践から考える保護者連携

2. 高野 裕子さん（フリーランスダンサー・阪南大学非常勤講師）

実践報告：からだごと関わる時間とその重なりーキッズ・クリエイティブ・ダンスの実践からー

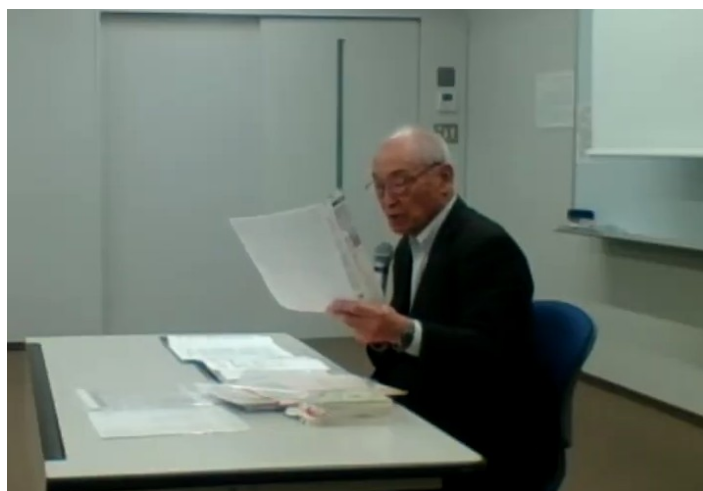
3. 田崎 由子さん（大阪綴方の会）

「汽水域」期における子どもの生活と表現

◆ 広木克行先生による講演

「不登校の『心の傷』が癒えるとはー子と親の臨床的支援実践から見える不登校の本質ー」と題した広木講演は、次の3点を柱として話されました。

- (1) 不登校の本質から見える支援空洞化の意味ー「心の傷」の無視ー
- (2) 4割もの子どもが相談できない現状の意味ー問われる相談文化ー
- (3) 本人の回復力に寄り添う支援の課題ー問われる支援者のあり方ー



具体的な事例を豊富に紹介され、あっという間の1時間半でした。「不登校問題の本質がわかった」「パワーポイントが使われていなかったが、すごい迫力だった」などの感想が寄せられました。

◆ シンポジウム「臨床教育学と私」

渡邊理事より、これまでのニューズレターで紹介された19名の会員の手記をもとにした報告がありました。臨床教育学における協同的探求とも言える試みが提起されました。

その後、フロアを4つのグループに分けて、意見交流を行いました。参加された方々の問題意識の交流を通して、臨床教育学について語り深めることができました。

◆ 定期総会

会員の洪さんに議長を務めていただき、2025年度活動報告、2026年度活動方針、2024・2025年度収支決算報告、2026年度予算について審議をし、すべて承認されました。また、大会中に寄付を募り、13名の方々から3万8,000円の寄付が寄せられました。ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

◆ なごやかな懇親会

大会終了後、懇親会を開きました。講師である広木先生も参加され、なごやかで楽しい交流となりました。



シリーズ：私と臨床教育学②9

学際性との向き合い

本多 祐子（愛知大学・中部大学他非常勤講師/名古屋市非常勤 SC）

「私と臨床教育学」。20 数年前にいただいた修了後の「宿題」の過程を、これまでの学びとして一旦ここで提出させていただこうと思う。ある出来事を機に、学位・資格取得自体が修学目的ではなかった私は、研究科が冠する学際性の意味を追求する人生にコミットメントした。その逆の眼差しを鏡に、私は専門性や領域を渡る紆余曲折の過程を経て、現在は複数大学の非常勤講師とスクールカウンセラーに従事している。臨床教育学は、その場での私の役割を、各専門性の接点と相違から考え続ける資源になり続けている。

「学び-教え」「支援する-される」「臨床-教育」などは、私には同義にある。「障害」「主体」「能力」などは、個のみから生起するものではない。「問題」も個に帰責し得ないが、誰かが捉えればそうなり得るし、伴って覆い隠される課題もある。例えば子どものそれは、社会課題や教育条件、専門家の権力性の問い直しを求めるメッセージとなる。

他者を真に分かることなどできない。「分かった」時点で「分からない」領域に追いやったものが必ずある。学問も研究も専門性もこの認識から生起する「分かろうとする」欲望が、「協働」「共創」に繋がるのではないか。結果的にその人に意味が見出されれば「支援」や「教育」となり得るが、同時に他の「誰か」には逆説的な意味を齎す可能性が必ずある。その集団で何かが決まれば、それではうまくいかない誰かの何かがある。一研究で得られた示唆は、それが絶対的ではないゆえに真理探究の精神が求められる。それが倫理的な実践や共創的対話に繋がるのではないか。

私がこのように考えるようになった原点は、研究科を構想された故新堀通也先生からの示唆にある。また、偶然の重なりで出逢った「対人援助職のための“統合的アプローチ研究会”」という、垣根を越えた対等な対話の“場”づくりの会が、臨床教育学と響き合った。ここでの宿題の表現（研究誌）も覗いていただければ幸いである（下記 URL 及び QR コード参照）。

人間たちが創る社会で、支配的価値も道徳・法制度等も変化し続けている。昨今の私は、そこに共存する人たちの社会で、矛盾や異なりを前提に社会的合意形成を目指した共創的対話に努めている。誰のための何のための学び・支援・研究なのか。変化する社会を生きる人々に、生のあり方をも学ばされている私は、今後も「私と臨床教育学」を問い続けていきたい。

<https://integrated-approach.jimdofree.com/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%AA%8C/>



（次回は梨木昭平さんの予定です。）



編集後記

第 20 回研究大会が終了しました。意欲的な編集委員会の「臨床教育学論集」の編集もあり、数十年ぶりに参加された会員の方との再会、オンラインを通じた全国の方々との交流ができました。感謝です。▶今回の広木講演で明らかにされた不登校の問題は引き続き考えていきたいと思います。▶学会通信のメール送信変更に可能な限りご協力ください。▶また小さな研究会での再会を楽しみにしています。

<文責：吉益、装丁：渡邊、発送：二羽>